

カロラン作「コール夫人」Mrs Cole

編曲、注釈：寺本圭佑

この曲はアイルランドの盲目のハープ奏者カロラン Turlough O'Carolan (1670-1738) が、ファーマナ州フローレンス・コートのジョン・コール John Cole (1680-1726) とジェーン Jane の婚礼を祝う歌として作曲しました。ジェーンを称えるアイルランド語の歌詞も残されています¹。

19世紀の画家、民俗音楽収集家のピートリ George Petrie (1789-1866) をして「カロランの最高傑作のひとつ One of Carolan's finest airs」と言わしめた名品です。ハープ奏者の演奏を採譜していたバンティング Edward Bunting (1773-1843) によると、この曲はカロランが崇敬していたイタリア人作曲家コレッリ Arcangelo Corelli (1653-1713) の音楽を想像力豊かに模倣した例だと指摘しています。

「コール夫人」は18世紀のハープ奏者に好まれたレパートリーでもあり、エクリン・オカハン Echlin O'Cathain (1729-aft. 1791)、チャールズ・バーン Charles Byrne (c.1712-aft.1810)、ヒュー・ヒギンズ Hugh Higgins (c.1737-1796) らが演奏していた記録が残っています。近年ではチーフタンズのデレク・ベル Derek Bell (1935-2002) がネオ・アイリッシュ・ハープで奏でています。

<ヴァージョンについて>

現在最も一般的に知られているヴァージョンは、前述のピートリの手稿譜に記されたものです。彼は1851年にThe Society for the Preservation and Publication of the Melodies of Irelandを設立し、同協会の会長を務めアイルランド各地の民謡収集をしていました。1902年から5年にかけて作曲家スタンフォード Charles Villiers Stanford (1852-1924) が、ピートリの遺した音楽手稿譜から1582曲を出版しました。

1958年に音楽学者オサリヴァン Donal Joseph O'Sullivan (1893-1973) がカロランの全集を編纂したとき、このヴァージョンを採用しました。オサリヴァンの全集は発表から70年以上たった現在でも多くの音楽家が参照しています。デレク・ベルやグローニャ・イエイツ Gráinne Yeats (1925-2013) もこのヴァージョンを元に編曲しています。筆者もピートリ（オサリヴァン）版で記憶しており、本書の編曲でも1と3は主にこのヴァージョンに基づいています。

オサリヴァンはそれまで多種多様な出版譜や印刷楽譜に記録されたカロランの曲をわかりやすく整理しました。彼の功績によってはじめてカロランの作品群の全体像を把握することができたのです。一方でオサリヴァンが活動していた20世紀中葉、カロランが演奏していた金属弦アイリッシュ・ハープの伝統は途絶えて久しかったため、彼はこの楽器に対する理解が欠如していました。たとえば、オサリヴァン版にはカロランが演奏していたダイアトニックなハープでは演奏不可能な臨時記号が書かれているものが少なくありません。したがって、実践の際には何らかの手を加える必要があるのです。

加えて、編纂の過程で彼が捨象してしまったヴァージョンへの再考察こそがオサリヴァン以降の課題だと筆者は考えています。アイルランドの伝統音楽は基本的に口頭伝承されており、ひとつの曲に対して様々な異なる「ヴァージョン違い」が存在します。それはアイルランド音楽の本質的要素であり、等

¹ [Ó Máille, 1915] p.152 アイルランド語のテキスト。1925-6年、オサリヴァンが英語によるパラフレーズを掲載しています。なお、婚礼の年は前妻フローレンスの没後、1718年以降からジョンの死（1726年）までの間とされています。

閑観してはならないものです。カロランの音楽も例外ではありません。その音楽がハープだけではなく、歌、フィドル、イリアン・パイプスなど別の楽器で伝承される過程で、伝言ゲームのように少しづつ姿かたちを変えていったのです。今回はこの点を踏まえて、「コール夫人」の編曲の際にどのような問題があったのか5つのヴァージョンの実例をあげて考察しましょう。

❖ ピートリ版（1902）

はじめに作品の全体像を知るために、現在一般的に知られているピートリ版の譜面を転載しておきましょう（譜例1）。

Madam Cole

George Petrie/C. V. Stanford
The complete collection of Irish music
London, 1902-1905

One of Carolan's finest airs.

The musical score consists of two staves of music. The top staff is in G major and the bottom staff is in C major. The music is in common time. The score includes measure numbers 1 through 29. Measure 1 starts with a quarter note followed by an eighth-note pattern. Measure 2 begins with a sixteenth-note pattern. Measures 3-4 show a continuation of sixteenth-note patterns. Measures 5-6 feature eighth-note patterns. Measures 7-8 show sixteenth-note patterns. Measures 9-10 show eighth-note patterns. Measures 11-12 show sixteenth-note patterns. Measures 13-14 show eighth-note patterns. Measures 15-16 show sixteenth-note patterns. Measures 17-18 show eighth-note patterns. Measures 19-20 show sixteenth-note patterns. Measures 21-22 show eighth-note patterns. Measures 23-24 show sixteenth-note patterns. Measures 25-26 show eighth-note patterns. Measures 27-28 show sixteenth-note patterns. Measure 29 concludes the piece.

* トリル記号を省略

譜例1. Petrie, Madam Cole, 1902

✧ リー版（1778/1780）

「コール夫人」の初出はカロラン没後 40 年の 1778 年、ダブリンのジョン・リーが出版した *Favourite Collection on the so much admired old Irish tunes* です²。リーの曲集は弟のエドマンドが 1780 年に再版しています。これらリーの曲集に、“Madam Cole”, “Planksty by Carolan” というタイトルで 2 種類のヴァージョンが記録されています。前者は大譜表、後者は単旋律で書かれています。リーの曲集についてオサリヴァンは次のように批判しています。

「間違った調号、間違った小節線、間違った音符、間違った音価、間違ったフレージング、省略されたフレーズ、ありとあらゆる間違いが含まれている³」。

リー版の「コール夫人」を見て音を出してみると、オサリヴァンの書いていることがすぐに理解できます。まずは単旋律の“Planksty by Carolan” から見ていきましょう。このヴァージョンは現在よく知られているものに比べると音域が狭く 2 オクターヴの範囲にとどまっています。では、明らかにリーのミスであろうと思われる個所を指摘しましょう。前半部分と後半部分の最後の 4 小節です（譜例 2）。



譜例 2. Lee, Planksty by Carolan, 1780

前半部分の 13 小節目のラソファレドは 29 小節目に合わせてラソミレドと弾くべきで、15 小節目 3 拍目からのレドシドも 31 小節目に合わせてレドシレと弾くべきでしょう。これは、音符の間違いの一例ですが、今回は音価の間違いとみられる部分に焦点を当ててみたいと思います。

² フラッドによるとこの曲集は、1748 年頃にカロランの息子ジョンが出版した父の曲集（現存せず）の第 4 版と言われています。オサリヴァンはこの説を否定しています。リー一族は 18 世紀後半のダブリンで楽譜出版を行っていました。サムエル Samuel Lee (d. 1776) はヴァイオリン奏者、バンド・マスターとして、クロウ・ストリート劇場で演奏会を開いていました。彼は、コークヒルに楽器店を開き、エセックス・ストリートに「サムのコーヒー・ハウス」というカフェも経営していました。1776 年に彼が死んだ後、寡婦のアンが楽譜出版の仕事を継ぎました。アンの 2 人息子ジョンとエドマンドも家業を継ぎ、18 世紀後半にそれぞれ別々の店で楽譜出版業を営んでいました。

³ [O'Sullivan, 1958/2001]79 収集家フォードは「このカロラン曲集には、正確に書かれたものは一曲も存在しない」と酷評しています。実際、18 世紀の印刷楽譜にはカロランの「アーサー・シーン Sir Arthur Shaen」や「ファニー・ディロン Fanny Dillon」など、奇妙な音価や不自然な小節線が書かれたカロランの作品が多数存在します。

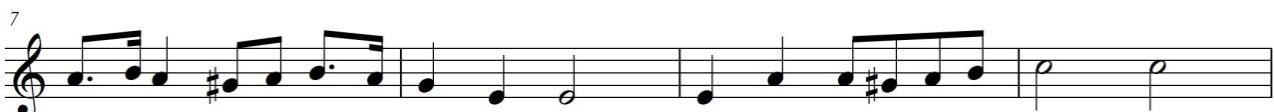
リーの曲集に収録されたもうひとつのヴァージョンである“Madam Cole”の8小節目に2拍分削られたような違和感(間違った音価)がある箇所があります(譜例3)。リー自身の“Planksty by Carolan”とピートリ版の同じ箇所と照合すると、彼自身のミスであるように見えます(譜例4,5)。



譜例3. Lee, Madam Cole, 1780



譜例4. Lee, Planksty by Carolan, 1780



譜例5. Petrie, 1902

これと同様に2拍削られたような違和感のある箇所が後半の24小節目にも存在します(譜例6)。先ほどと同じように“Planksy by Carolan”と比べてみましょう(譜例7)。旋律がかなり異なっているのでわかりづらいですが、“Madam Cole”は2拍分削られているように見えます。参考までにピートリ版の同じ箇所も掲載しておきます(譜例8)。ただし、リー版、ピートリ版以外の譜面と照合した場合、この24小節目をどう弾くべきかは慎重に考えなくてはならない問題であることがわかりました。



譜例6. Lee, Madam Cole, 1780



譜例7. Lee, Planksty by Carolan, 1780



譜例8. Petrie, 1902

✧ バンティング版（1796）

1796年にバンティングがダブリンで出版した *A general collection of the ancient Irish music* に “Madam Cole” が記録されています。彼は優れた鍵盤楽器奏者で、ハープ奏者たちの実際の演奏を書き取ってそれをピアノ編曲していました。バンティングはこの曲をハープ奏者チャールズ・バーンから採譜したというメモ書きを残しています。彼はカロランと同時代に活躍した盲目の叔父の従者を務めており、ハープ奏者になるように仕込まれました⁴。

バンティング版の24小節目を確認すると、リーの曲集と同じく2拍分削られた譜面になっています（譜例9）。バンティングはリーの曲集からこの部分を写したのでしょうか。あるいは情報源であるハープ奏者がこのように「前のめり」な演奏をしていたのでしょうか。

オサリヴァンは1925年の著作でこれについて「不十分であり、2拍分抜け落ちている」と指摘し、ピートリ版から校訂した譜面を掲載しています（譜例8を参照）⁵。たしかにバンティングの出版譜には不注意な点も見受けられました。しかし、この部分は本当に彼のミスだったのでしょうか。判断はいったん保留にして別の資料に目を向けてみましょう。



譜例 9. Bunting, 1796

✧ マクリーン＝クレファン版（1796）

「コール夫人」が記録されたもうひとつの興味深い資料があります。1816年に書写された『マクリーン＝クレファン手稿譜』 MacLean-Clephane MS. です。この手稿譜は18世紀スコットランドの牧師パトリック・マクドナルド Patrick MacDonald (1729-1824) が1784年以前にエクリン・オカハンの演奏を採譜した譜面の写しでした（オリジナルの手稿譜は消失）。オカハンはアイルランド北部出身の盲目のハープ奏者で、当時もっともすぐれた奏者のひとりとみなされていました。彼の師はカロランの友人コーネリアス・ライオンズ Cornelius Lyons でした。この資料は1990年代に再発見されダブリンのトリニティ・カレッジ図書館に寄贈されたもので、オサリヴァンはその存在を知りませんでした。

ではこの資料で問題の個所を照合してみましょう（譜例10）。後半部分の24小節目を見ると、リー や バンティングとはまた一味違った違和感があります。つまり、23小節目と24小節目の間が1小節分まるごと抜け落ちているように書かれているのです。実際、他の版は32小節で終わるのに、マクリーン＝クレファン版は31小節までしかありません。



譜例 10. MacLean-Clephane MS, 1816

⁴1840年の出版譜ではヒュー・ヒギンズから得たとも記しています。

⁵ [O'Sullivan, 1925-6 /1967]pp. 54-56 チャールズの叔父はカロランの作品を盗んでいたという逸話があり、カロランは彼をひどく嫌っていたといいます。

◆　まとめ

これら「コール夫人」の後半部分に見られる奇妙な個所は編者の単純なミスなのでしょうか。リー版とバンティング版だけ参照していればその可能性も考え得るでしょう。ただ、これに加えてオカハンの演奏を採譜したマクリーン＝クレファン版を参照すると、また別の見方ができるのではないかでしょうか。

どうも18世紀のハープ奏者たちは「コール夫人」の後半部分、24小節あたりを曖昧かつ自由に演奏していたように思われてなりません。これを単純な記譜の間違いとして打ち捨ててしまわず、アイルランド伝統音楽の多様性や豊潤さを示す「ヴァージョン違い」のひとつとみなせば、ポジティブに編曲に採り入れができるのではないかでしょうか。バンティングの24小節目などは、実際に何度も繰り返し弾いていると、前のめりな旋律に一種の躍動感すら覚えます。あるいは俳句の字足らずのような趣もしみじみと感じられます。今回はこれらの点を踏まえて、なるべくヴァージョン違いを活かした編曲を行いました。

<臨時記号>

臨時記号はすべて省略しています。バンティングの譜面を見ると主旋律には臨時記号は一度も現れないで、おそらくそのように演奏されていたのだろうと推測できます⁶。奇妙なのは、オカハンの演奏を採譜した資料の筆写譜である『マクリーン＝クレファン手稿譜』に臨時記号が現れていて、どのように弾いていたのかが疑問に残ります。オクターヴごとに違う調弦を行っていたのか、そもそも臨時記号は弾いていなかつた可能性もあります⁷。この譜面を書写したマクリーン＝クレファン姉妹はペダルハープを演奏していたので、自分で演奏するために臨時記号を書き加えてしまったのかもしれません。

<収録内容>

本書は筆者が制作している19弦あるいは20弦の金属弦ハープのために編曲したカラランの「コール夫人」です。計4種の譜面を用意しています。

1と2は調号なしのAマイナーの譜面。G3-D6の19弦のハープで弾くことを想定していますが、もちろん20弦でも弾けます。3と4は#がひとつ付いたEマイナーの譜面。20弦のハープ(G3-E6)のための編曲です。3はオカハンのヴァージョンを一部に採り入れて、後半部分は31小節で終わっています。1と3はこれまで論じてきた譜面を踏まえて、あえて少しずつ違う旋律を書きました。リピートの際に変化をつけるなど、ご自身のヴァージョンを作られるのも一興でしょう。空五線譜を用意しましたので役立てていただければ幸いです。

序文で論じた5種類の「コール夫人」の単旋律譜も収録していますので、アレンジの参考にしてください。これをご覧いただくと、筆者によるアレンジ部分がわかると思います。

1. 寺本圭佑編曲「コール夫人 1」Aマイナー、19/20弦ハープ用
2. 寺本圭佑編曲「コール夫人 2」Aマイナー、19/20弦ハープ用、指番号、ダンピング記号付き
3. 寺本圭佑編曲「コール夫人 3」Eマイナー、20弦ハープ用
4. 寺本圭佑編曲「コール夫人 4」Eマイナー、20弦ハープ用、指番号、ダンピング記号付き

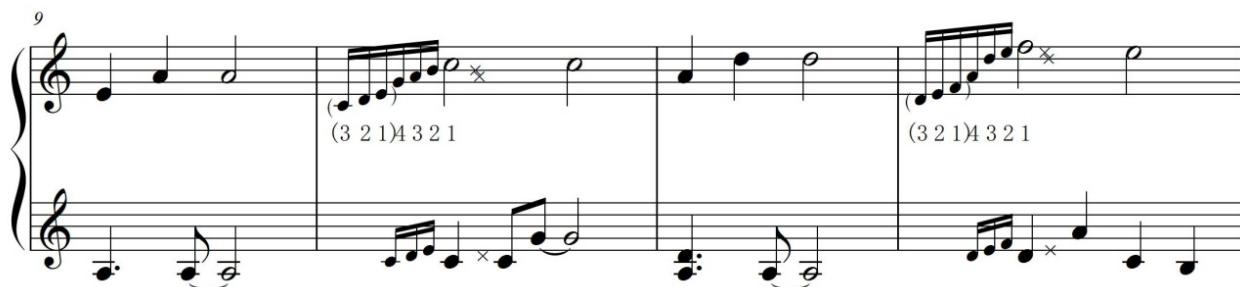
⁶ デレク・ベル [The Chieftains, 1993] やグローニャ・イエイツも臨時記号を省略しています。ただし、The Chieftains 10では臨時記号をつけて演奏しています。

⁷ C4の音はあらかじめ半音上げておくことによってダイアトニックのアイリッシュ・ハープでも演奏可能です。

5. Edmund Lee, "Madam Cole" 1780, 单旋律譜
6. Edmund Lee, "Planksty by Carolan" 1780, 单旋律譜
7. Edward Bunting, "Madam Cole" 1796, 单旋律譜
8. MacLean-Clephane, "Mrs Cole" 1816, 单旋律譜
9. George Petrie, "Madam Cole" 1902, 单旋律譜
10. 空五線

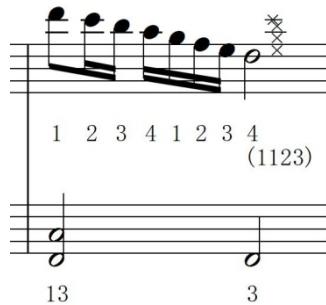
<演奏のコツ>

最後に少しだけ演奏法の補足説明しておきます。「コール夫人 1」の 10 小節目、12 小節目に用いた装飾法は両手で弾きます（譜例 10）。括弧の中の音は左手を用います。その後、×印が書かれた音をダンピング（消音）してください。



譜例 10. 「コール夫人 1」 寺本, 2020

「コール夫人 4」の 28 小節目のダンピングは、1123 の指でドシソミの音をダンピングします（譜例 11）。このとき親指を弦に深めに置いて、指の裏側を用いてドの音を止めてください。



譜例 11. 「コール夫人 4」 寺本, 2020

ダンピングや金属弦ハープ特有の技法については拙著『初学者のための金属弦ハープ教本 40 の基礎練習と 18 のケルト音楽』をご参照ください。<https://cinamon.thebase.in/items/28696789>

ご不明点があれば、オンライン教室もご活用ください。<https://teramotokeisuke.com/onlineclass/>

参考資料

- Bolger, Mercedes & Yeats, Gráinne. (1998). *Sounding Harps Music for the Irish Harp Book Four*. Dublin: Cáirde na Cruite.
- Bunting, Edward. (1796/R2002). *General Collection of the Ancient Irish Music*. Dublin: Walton Publishing.
- The Chieftains, (1981) *The Chieftains 10: Cotton-Eyed Joe*, Claddagh Records.
- The Chieftains, (1993) *The Celtic Harp, A tribute to Edward Bunting*. New York: BMG Music.
- Fleischmann, Aloys. (1998). *Sources of Irish Traditional Music c. 1600-1855*. New York: Garland.
- Lee, Edmund. (1780). *A Collection of Irish Airs by the Celebrated Composers Carolan and Conolan*. Dublin.
- Maclean-Clephane, Ann-Jane. (c.1816). *Maclean-Clephane Manuscript*.
- Petrie, George & Stanford, Charles Villiers (ed.) (1903/1994). *The Complete Collection of Irish Music from the original manuscript*. Felinfach, Wales: Lanerch Publishers.,
- Ó Máille, Tomás. (1915 /1988). *Amráin Cearbllán The Poems of Carolan*. London, UK: The Irish Texts Society.
- O'Sullivan, Donal. (1925-6 /1967). *Journal of the Irish Folk Song Society volume 5 The Bunting Collection, 1796*. London: Wm. Dawson & Sons, Ltd.
- O'Sullivan, Donal. (1958/2001). *Carolan: The Life Times and Music of an Irish Harper*. Cork: Ossian.
- 寺本圭佑『18世紀アイルランドにおけるハープ音楽 —その興亡の資料的検証—』(2010年、明治学院大学大学院博士論文)

編者の紹介

寺本圭佑（てらもとけいすけ）

京都市出身、横浜市在住。15歳から雨田光示氏にハープを師事。坂上真清氏からネオ・アイリッシュ・ハープを学ぶ。アイルランドやスコットランドでシボーン・アームストロング、アン・ヘイマン、ビル・ティラー各氏から金属弦ハープの手ほどきを受ける。音楽学を樋口隆一氏に師事し、資料研究の方面からもアイリッシュ・ハープの歴史と真実を追求。18世紀以前のアイリッシュ・ハープの研究により芸術学博士(明治学院大学大学院)。19世紀末に伝統の途絶えた「金属弦アイリッシュ・ハープ」を専門とし、この楽器の魅力を伝えるため、全国で演奏やレクチャーコンサート、ワークショップを開催。2020年7月現在214台の金属弦ハープを制作し、普及活動に役立てている。2017年、BS-TBS「ここるふれあい紀行～音と匠の旅～」にアイリッシュ・ハープ研究家として出演。ケルトの音色を現代によみがえらせる活動を特集される。『ケルト文化事典』(東京堂出版)の「ハープ」「オカロラン」等の項目を担当。

<https://teramotokeisuke.com/>